

①



慈光

秋号

- ①お知らせ
- ②秋季彼岸会
- ③報恩講
- ④住職のコラム

婦人会コンサート

○報恩講 秋季彼岸会永代経法要のお知らせ
 ②頁と③頁に行事の詳細をお知らせしております。慈光寺では秋の行事シーズンを向かえます。ぜひ、お詣り下さい。

○慈光』発行回数の変更

今年度の夏号からお盆詣りの御案内を兼ねて、納骨仏壇ご利用の方を中心に「お盆号」を発行いたしました。郵便料金、ならびに振込手数料の大幅な引き上げに伴い、「慈光」の発行回数を減らしました。お寺の行事予定や報告などが、ぎりぎりになってしまい、皆様にはご迷惑をおかけいたしますが、どうかご理解をお願いいたします。

○秋以降の住職のOFFER

住職、坊守が対外的に動くことが増えてしまい、特にウィークデーは午後二時頃まで不在の時間が増えてしまいました。

前坊守が寺院を守ってくれておりますが、急な連絡や、直接、住職と連絡を取りたいときは、住職の下記の携帯電話に遠慮なくおかけ下さい。法務中や運転中など、すぐに電話に出られないかもしれませんが、かけ直しますので、よろしくお願い申し上げます。

なお、寺務室業務は、土日のパソコン業務ができないため、お休みをしています。連絡は通常通り取れます。

② ○秋季彼岸会「永代経法要のお知らせ」

九月二十一日(土)・二十三日(日) 午後一時より

※法要後 真宗講座 浄土の相
おとぎ(昼食)

午前十一時半頃からご用意しております。

○納骨堂参拝期間

九月二十一日(土)～二十四日(月)

午前九時から午後五時頃まで

※時間外、参拝ご希望の方は、恐れ入りますが、一度お寺にお問い合わせてください。

※供物は、お詣りの後、お菓子などの賞味期限の長いもの以外、お持ち帰り下さい。食品ロス軽減のため、ご協力を願います。

※供花をご用意しております。ご利用下さい。

※右記彼岸会期間中、月詣りはお休みとなります。

春と秋の彼岸会は日本独自の行事です。それに合わせ、慈光寺では、永代経の法要を勤めております。

慈光寺へ永代経として志納いただいた方や、私たちの本山錦織寺へ納骨堂をされた方など、本尊阿弥陀如来への奉告をするのが、永代経法要の意味です。

とかく、永代経を納めたら、後は「終わり」と言われます。意味としては間違いはありませんが、私たちは、いろいろな「縁」の中で生きております。法要はその「縁」を考える行事でもあります。

一般には「同慰霊祭」と言いと分かりやすいかもしれませんが、私たちが春と秋の二回に法要を行うのは、日本特有の彼岸会に合わせて、伝統を大切にしているからです。

浄土真宗での「彼岸会」は慰霊ではありませんが、我々の世界「此岸」から、あらためて西方浄土「彼岸」へ思いを馳せ、故人を通して、生かされている現実を考えさせられる大切な行事でもあります。

法要の後には、住職が、仏教的な意味を考えながら、真宗独自の浄土観について、考えてみたいと思っております。



○平成三十年宗祖親鸞聖人報恩講日程

十月二日(木) 大逮夜 午後一時三十分 法話二席

初夜 午後五時半 法話一席

十月三日(金) 晨朝 午前七時 法話なし

結口中 午前十一時 法話一席

布教師 香川県 善性寺住職 千葉憲文師

お若い布教師様です。とても分かりやすく、また従来の伝統にとらわれなくて、お話をされる方です。

法話の一席は三十分から四十分程度ですので、一席でもお聞きになられてよろしいと思います。

是非お気軽におまじりください。

○十月以降の行事予定

十月十五日(木) 十六日(金) 龍谷大学出講

十一月二十二日(木) 平成三十年度追弔会

午後一時半より

十一月二十四日(土) 二十六日(月) 錦織寺上山

十二月一日(土) 布教日

○慈光寺協賛行事

九月八日(土) 午前十時半頃から総合避難訓練

慈光寺の所属する町内会の避難訓練に私たちも参加します。この度、住職は、防災管理者の資格を取得しました。まだまだ不勉強ですが、協力をしたいと思います。

九月九日(日) Magic&JAZZ LIVE 慈光寺 午後五時より

十一月十一日(日) エブサリバンショー 午後三時より

特別ゲスト 堀江淳氏 タモリーグラスで一躍有名



住職さんにきいてみよう その43 伝える

④

夏号がなかったもので、間が空いてしまいました。前回は「救いの対象」について少し書きました。仏教は、人を救う教え？死者を弔う教え？哲学？という聞かれることがあります。仏教は、自身を見つめ直し、その苦しみに自らが気がついていく教えであり、苦しみを克服するための「悟り」を説くのが、インド以来の教えだと思います。

ではそれぞれの経典が成立したのは、全部、仏教を開かれたお釈迦様が説いたの？と聞かれますが、厳密には違います。今、私たちが読むことができるのは、インドからシルクロードを経て、中国、朝鮮半島から伝わり翻訳されたお経で、お釈迦様が説いた教えとは異なります。それぞれの地域で影響を受け、言語も異なるし、習慣も違います。日本へ伝わって日本古来の宗教と融合し、今日に至っています。今は世の中の考え方と異なり、「仏教」という言葉のみが、先行して中身については、私の自戒も含めて、学んでいない僧侶も増えているように感じます。

仏教によって救われるのか。僧籍を持つ者としては、それ故、今日まで伝わっていると答えますが、経

典にどのように説かれているのか。前回から触れている『無量寿経』というお経には、物語としては、浄土の世界について語られ、その世界へ誰もが往くことができる」と書かれています。誰が導いてくれるのかについて、お経の後半になって語られてきます。

新たな登場人物として弥勒菩薩が出てきます。弥勒菩薩の名は、各所で聞くことがあるかと思いますが、この世に出現する救済仏と言われ、すべてのものを浄土へと誘い、自らも仏となると言われています。しかし、弥勒菩薩は、五六億七千万年後に出現すると表現されていて、現実的な数字には思えませんね。

弥勒菩薩は必ず一切衆生を救うと言われ、古来より「弥勒信仰」の高僧も多くなりました。

親鸞聖人は、仏の救済に何の疑いもない心を持つことで、その者は「弥勒と等し」といいます。それだけ弥勒菩薩の地位は高いと見ているのでしょう。結局、何かの対象となるものがないと、人は仏の教えにも疑いを持ってしまいます。こういう私が一番、仏の教えを信じていない、不届き者ですね。無条件の救いと無条件の願いは、永遠の課題であると感じます。